エブラード王国物語－異界の魔獣使い－

hiro33

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エブラード王国物語－異界の魔獣使い－

【Ｎコード】
Ｎ１９３３Ｙ

【作者名】
ｈｉｒｏ３３

【あらすじ】
魔道船の事故に巻き込まれ大河にながされ、契約していた精霊とは契約廃棄となり、気づけば猫型らしくない魔獣と契約することになり、エブラード王国を中心に物語は進みます。

異界の魔獣使い（前書き）

はじめまして初投稿です。最後まで続けるようにがんばります。投稿できる時が不定期になると思います。感想いただければ嬉しいです。

異界の魔獣使い

プロローグ

その日、王都エブラード付近にて前代未聞の事故が発生した。
魔道船ー方舟ヴァンガードー　最大収容人数１５００人
事故当時の乗員乗客は１３００人

巨大な飛行船ヴァンガードは
王都を出発後、乗員乗客を巻き込み大河へと墜落する。

死者行方不明者１２４６人生存者５４人と言われ、今世紀最大の魔道船事故として
後世の歴史書に記されることとなる。

乗員乗客にとって不運だったのは、ヴァンガードが大河ではなく大地に墜落
していればまだ生存者が多かったはずであった。
本来ならば墜落しても生存できるように、魔道師が施した魔方陣により乗員乗客の
命が助かったはずなのだが、墜落した場所が悪すぎたのだ。

大河ムーリルヴァの川のど真ん中へと墜落し、
乗員乗客１３００人を乗せたヴァンガードは大河に沈んだのだ。

泳げる者がいても大河に住む水棲の妖獣、魔獣の餌となり、運の良い乗員乗客で泳げる者、
ごくわずかな魔道の使い手のみが生存することが出来たと言う、史

上最悪な大規模事故であった。

岸からの救助を行おうにも、大河にいる数多の水棲の妖獣、魔獣により近づくことも出来ず
大河は乗員乗客の阿鼻叫喚と水棲の妖獣、魔獣の歓喜の咆哮が続き、大河が犠牲者の血で赤く染まったと後世に伝えられた。

魔道船一方舟ヴァンガード一空を飛ぶ飛行船の先駆けであり、先駆者としてつけられた。
ヴァンガードの名は、皮肉にも後世に大規模飛行船事故における先駆者として名を残してしまったのである。

異界の魔獣使い１

１

魔道船ー方舟ヴァンガードーの事故より一月が経った。

王都エブラードより公式発表として、魔道船ー方舟ヴァンガードーの乗客に
五大英雄の一人、傭兵王ルクサス公の孫の死亡を公式に伝えられ喪に服することとなる。

五大英雄とは

傭兵王ルクサス公

騎士王ヴァルチス公

精霊巫女姫ルチア

魔道王ガーリァ公

盗賊王ムルサ公

の５人を指す。

そして彼らと共に魔族の脅威より世界を救った救世主として
王都エブラードの王にして、異界より流れてきたユウキ・スガワラを聖王として
現在の王都エブラートはまとめられている。

◆◆◆◆

話は一月前に遡る。

大河ムーリルヴァに起きた、魔道船ー方舟ヴァンガードーの事故より数時間後である。

「なんとか岸につかねば」

大河ムーリルヴァに魔道船より投げ出され数時間、今だ大河から上がれず流されるまま

船の残骸と思われる木片につかまりなんとか生存してはいるのだが、その命もまもなく尽きてしまうのではないかと、思わずにはいられない。

投げ出された直後は酷い有様だった。

泳げる者は、片っ端から水中へ引きずりこまれ溺死させられ死んでゆく。魔道船が大河に沈んだ

ことからも、大多数の乗船乗客が今だ魔道船の中にいるはずだろう、そしてその者達も

すべて脱出出来ぬまま溺死していったことだろう。

「悪運が良いのか悪いのか・・・ありえない世界だ」

とりあえず五体満足には生きている。怪我もなく、今の所妖獣、魔

獣に気づかれてはいない。
これがもし怪我でもしていれば血の臭いから妖獣、魔獣に襲われていたことは間違いないはずだ。

自分が助かった理由は、投げ出された直後に余り動かなかったことではないかと考える。

どれだけ流されこうしているのかもわからず、岸にたどり着こうにも川幅が広すぎるのだ。
流れは緩やかで、周囲に散乱する漂流物を見れば生存している者は自分だけ。
流れに逆らわず、なんとか岸へと近づこうとしているのだが、なかなかに難しい。

頼みの契約精霊を頼ろうにも、精霊との証である紋様が肌より消えている。
考えられることは、精霊が契約を廃棄したと言うこと。
「まさか死に戻りか」
ありえなくはない。大河に投げ出されたショックかはわからないが、一時的に心肺停止でもした可能性がある。

契約精霊とは、自分の能力になってもらうべく精霊と契約することだ。

強制的に契約することと、自然に契約出来る2種類のやり方があるのだが、自分の場合は前者だった。
自分が生まれた時に、家族が強制的に精霊と契約させたのだ。

自分としては物心つく頃からいた精霊だったが、契約が廃棄された状態だと言うことは自分が一時的にも死んだからとしか思いつかな

い。
精霊との契約廃棄には契約した者が死亡した場合と、契約した精霊から愛想つかされるかなのだが、自分の場合は
一時的でも心肺停止したからとしか思いつかない。

精霊は契約者が死ぬと契約解除されてしまうため、「死に戻り」、「黄泉返り」した者は契約した精霊との契約が解除されてしまい、今まで使役していた精霊が使えなくなってしまうのだ。
「死に戻り」、「黄泉返り」はそれほど珍しいことではないのだが、冒険者や傭兵、騎士がそうなってしまうと今までのように活動することが
難しくなるため、新たな精霊と契約しなおさなければならなくなってしまうのである。

「なるようにしかならないかもだが、諦めるのも癪だ。こんな面白そうな世界だし」
死ぬかもしれないと、諦めるのは簡単だ。
だが、こうして生きている以上命を捨てる気もないのも確かだ。

そろそろ掴まっているこの木片よりも、安定した大きさの浮遊物はないかと周囲を見渡せば、樽が浮いているのが見える。
掴まるのは不安定があるが、確実に沈まないものとなるとそれくらいしか見当たらないので、移動する。

樽は自分がなんとか抱え込める大きさだった。
これを浮き輪にすこしずつ上がれそうな岸を探して移動する。
どれほどの距離を、流されているのか分からないがなんとか移動することは出来そうだ。

『・・フギャ・・』
掴んでいる樽の中から何かの声が聞こえた。
「???」
空樽ではなかったのだろうか？
『だkら・・・で・・』
声は動物のようなもの？と言葉のようなもの？が聞こえるのは気のせいだろうか？
「樽の中に誰かいますか～？」
コンコンと樽を叩いてみる。

何も聞こえず、自分の気のせいらしい。
「長時間の漂流での幻覚か・・・」
低体温状態になりつつあるんだろうか、これは早急に岸めざして上陸せねばと考える。
「幻覚酷くなる前に岸目指すか。ここまでくればこれに掴まる必要なさそうだしな」
樽からはなれて泳いで岸を目指すことにした。ここまでくれば妖獣、魔獣の気配が薄い。

『まっ！待て・・・』
どうやら空樽には誰かいたらしい。

「こんにちわ。誰かしりませんが、人間じゃなさそうです」
『お願い岸へ一緒に・・・』
樽の中に何かいるか分からないが、同じ魔道船に乗っていたよしみで樽ごと岸まで泳ぐことに変更する。
「とりあえず岸まで、なんとか泳ぎつくようにするので、無事ついたら樽から出してあげます。ただし

襲ってこないで下さい。人族じゃなさそうだし」

『分かった・・・』

何が樽の中にいるのか気になるところです。

異界の魔獣使い１（後書き）

続いて投稿です。　よろしくおねがいします。

２

たどり着いた岸辺は、漂流物がたどり着きやすい形状になっているのか、そこかしこと魔道船の残骸や
荷物とおぼしきも物、余り見たくはないが人だった物の一部が流れついている。
「さすがにきつい・・・」
なんとか樽を抱え、やや開けた場所へ移動する。
あとで流れ着いた荷物を確認してみようと思うが、濡れそぼった服が気持ち悪い。
「樽開ける道具探すので、待っててください」

自分の持ち物の確認が先だ。
腰に挿したはずの精霊憑きの剣は、やはりない。
腰に付けた冒険者用の道具袋２つは無事だった。

これは冒険者なら、誰でも所持できる小袋で重さを感じずに持ち運び可能なため旅の必需品だ。
これが流されなくて良かったと思う。

小袋から樽を開けるに使えそうな小剣を取り出す。
「とりあえず開けます剣先に気をつけて」
ぐりぐりと少しずつ樽の縁に小剣を差込なんとか蓋を開ける。

『やった！出られたわ感謝する人間』
飛び出して来たのは真っ白な子猫？体全体に模様が入って・・・・

「・・・驚いた白雪彪（はくせつひょう）の幼生体ですか」
まんま子猫にしか見えなくはないのだが、知るものが見れば白雪彪の幼生体だと分かるはずだ。
雪山に生息し、その毛皮は王侯貴族に好まれるＳＳランクの魔獣。
知能が高く狩るのはたやすくないため、滅多なことでは狩ることが不可能な魔獣である。

『わかるの？』
剣呑な眼差しで見ないでほしい。

「分かる人は分かるはずですね。そのままじゃ何なので、首輪外していいですか？」
人にしか外せない仕様の隷属の首輪が、邪魔だろうと思う。

『えーこれ結構気に入った首輪なんだけどキラキラして』
見た目は確かに綺麗な宝飾をほどこしているのだが、隷従の首輪で追尾機能付のはずだ。

「付けたいのはかまいませんが、それ追尾機能付で隷属の首輪ですよ。付けた人間が貴方が生きていると分かれば追っ手がくるはずです」

小袋から自分の代えの服を取り出しつつ、濡れた服を脱ぎながらそう教える。
『ええっ！外して頂戴！人間！』
知らなかったのか、外せ外せとうるさい。

「着替えさせてください。まぁあの事故の混乱で、直ぐは大丈夫なはずです」

なにせあれだけ規模の大事故だ。どれだけ下流に流されたのか分からないが、墜落した周囲はすごいことになっており、それどころではないはずだ。
「白雪彪さん貴方の名前は？私は人間と言う名ではなく、スズ・・いえセルファです。人族の男になります」

『名前なんてないわ。気づいたら人間のとこにいて、あの船でどっか連れていかれるとこで・・・』
なんとか自分に起きたことを説明してくれた。
ハンターにでも生後まもなく捕まったのだろう。

「そうでしたか。では仮の名前を付けてもいいですか？名があるほうが呼びやすいですしね」
なんとか濡れた服をすべて脱ぎ着替えの服を着込む。
やはり精霊契約の証は体から消えていると思いながら。

『・・・出して！・・・』
白雪彪の入っていた樽からまた声がする。

どうやらまだ何か入ったままだったらしい。
「まだ何かいるようですね・・・・」

『忘れてた・・・』
白雪彪は自分が入っていた樽に顔を突っ込んで、何かを銜える。
樽には何がいるんだと、セルファがみれば、小人族３名と何か分からないコブシ大の卵が１つあった。

異界の魔獣使い２（後書き）

連続投稿です。

3

「野営の準備した方がよさそうです」
白雪彪が気になるが、詳しいことは野営準備を整えてからのほうが安全だろう。

「白雪彪さん詳しくは野営準備後と言うことで、この場所は完全に安全かわかりませんので少し移動します」
まぁ逃げたきゃ勝手に逃げてくれてかまわないのだが、野営準備してからで遅くないだろう。

セルファは野営準備の為に、小袋から結界石を４つ取り出す。
精霊契約が切れてしまい、精霊魔法が使えなくなってしまった不便さは多少あるのだが、
結界石さえあれば周辺にいる魔物を寄せ付けることはないだろう。

ただし、すでに結界の中にいる魔物に関してはその限りではないが
野営準備に必要な広さの四方に石を置き。中心に魔よけの魔方陣を展開させると、大人が３人余裕で眠れる大きさのテントを取り出し設置する。

テントの幅を利用して紐を結び、濡れた衣類をそこにひっかけ濡れた衣類をそこで乾かすことにする。

魔方陣からそれほど離れていない場所に火の準備をすることにして、その辺に落ちていた枯木を集められるだけ集め、簡易竈を作るため

の石もいくつか探し出し準備する。

「こんなもんかな」

安全面が気になるところだが、とりあえずは休む必要があるだろう。

『セルファ感謝するわ。人間でも良いやつはいるのね』

隷属の首輪をはずしてもらって白雪彪は、毛づくろいしつつそう告げる。

「さてどうでしょう。それよりも、これからどうしますか？」

所持していた簡易食で簡単な食事をすませ、ぎこちない様子の小人族へ聞く。

樽の中にいた小人族は女の子2人と男の子1人だった。

お姉さんな感じがエル、やや恥ずかしがりな子がミル、男の子はカイと言う名で

白雪彪の世話をする為に船に乗せられたらしい。

彼らも無理矢理、住み慣れた森から連れ去られ人間に隷属を強いられたらしい。

「王都では隷属する者は、犯罪者以外は禁止されたはずですが、どこにも馬鹿はまだまだいるようです」

『セルファさんありがとう』

『ありがとな』

『ありが・・・とうございます』

助けてもらった礼を言われるのは悪い気はしない。

小人族をこうして近くで見るのははじめてだが、なかなかに小さく

愛玩用に隷属させたくなる
気持ちも分からなくはない。が、セルファ自身隷属することには反対だ。
人であり他種族であろうが、犯罪者でない限り隷属し、自由を奪う権利はないと思っているからだ。

『セルファ、名前頂戴。名無しはなんか嫌だし』

「そうですね。貴方は白雪彪ですし、安直ですがシラユキはどうでしょうか？
異界語の言葉ですが、白い雪と言った意味ですが」

異界語、聖王と呼ばれるユウキ・スガワラの故郷の言葉だと教える。
『シラユキ・・・私はシラユキ！わかったわ』

「気に入ったようでなによりです。省略して呼ばせたければユキだけでも良いでしょう」

『セルファさん助けて貰ってなんなのですが、お願いがあるのです』
小人族のエルがそう告げる。

「なんでしょうかエルさん？」
だいたい何が言いたいか分かるような気はするが、セルファは聞いた。

『森へ帰りたいのです。私たちが住むエザイラの森へ・・・連れて行ってくれませんか』

やはりと思う。元居た場所へ戻りたいと誰もが思うことだ。
「・・・残念ですが、今は無理です」

そう言われた小人族が泣き出すのは当然で、助かった喜びもつかの間奈落へと落とされた気分だろう。

異界の魔獣使い３（後書き）

連続投稿です。よろしくお願いします。

４

『ちょっとセルファ、そんな言い方な・・・』
怒ったシラユキがガシガシと、セルファの腕に噛み付いてくる。
シラユキに噛み付かれるのは痛いが、生きた毛皮の手触りは格別なものだと思う。

「泣かないで、今はと言っただけです。痛いですよシラユキ！
こっちの理由も聞いてからにしてください」
こんなシラユキはかわいいなぁと、のんきに思いつつも、現在の自分の状況を話すことにした。

「見て分かると思いますが、私は人族で本来なら精霊魔法を使用していました。精霊魔法は誰でも使えるようになるわけでないのはわかりますか？」

『わかる・・・私たち捕まえた人間は使えなかった。雇われた冒険者が使っていたのは見た』
ミルが泣くのをなんとか堪えつつ呟く。

「人族では、冒険者になるのはだいたいが精霊魔法が使える者や魔獣使いだけです。私も冒険者ですが、コレを見てもらえますか？」
小袋から取り出したのは、冒険者ギルドのランクカードだ。

セルファ・？？？？？？
ＡＧＥ：１１２

ＳＥＸ：？？？
ＪＯＢ：？？？？？
ＨＰ：？？？
ＭＰ：？？？？？？？
ＩＮＴ：８０６４
ＤＥＸ：２１６
ＶＩＴ：５３７
ＳＴＲ：１４２
ＡＧＩ：４６７
ＬＵＫ：７２３

称号：？？？
契約精霊：？？？？

冒険者ギルドランク：　？？？？

『・・・年齢１１２！って人族じゃ。他も人族じゃありえない！』
カードを覗き込んで見るカイがありえないと叫ぶ。

「ええ、カードがバグっています。本来ならこんな数値はありえないですが、
私のこの体の年齢は１９です」
普通ならギルドカードがこのようになることはありえないのだ。

「今は無理と言った理由がコレです。困ったことに今の私では精霊魔法も使えません」
さてどうしたものかと思う。
カードを見た限り表示されている数値はめちゃくちゃだし、
自分のギルドランクさえ分からない状態になってしまっているのだ。

『死に戻り・・・ですか？』
エルがそう呟いた。

「知ってましたか。多分としか言えないのですが、こうなる前に私は複数の精霊と契約してました。着替えた時にすべて確認しましたが、
契約していた精霊の紋様はすべて消えています。今の私では、貴方たちの言うエライザの森へ辿り着くことは非常に難しい。なので今は出来ないと告げただけです」

依頼されてエライザの森まで向かうのはかまわないのだが、精霊無しでは無理としか言いようがないのだ。

エライザの森は最低でもBランクの魔獣が出没するし、個人で行くのは難しくどうしてもチームを組まないと無理なのである。
「可能なのは、ふたたび契約してくれる精霊を探してからとなります。それが何年かかるかわからないので直ぐは無理ですし、
早く帰りたいと思うのであれば、私など無視してランクの高い他の冒険者に依頼するしかないですね」

「死に戻り」も困ったものだと思う。今までしてきたことがすべてパァになるのだから。
ただ「死に戻り」にも1つだけ幸運が付けられる。精霊契約を廃棄される代わりに、あることが戻るのだ。
それを今は、セルファも話すつもりはない。

『ねぇねぇ・・・セルファ契約って他のとは出来ないの？』

シラユキがふと魔獣である自分の今を考えて思う。
自分はかなり珍しい魔獣と言うのをセルファから聞き知った。
今の状態では、また誰かに連れ去られる可能性もあるんじゃないだろうか・・・
どこから連れ去られたのか、両親の居る場所さえ分からないし、これから何かをすると言うことも思いつかない。

「精霊以外でも出来ますよ。魔獣使いと言うのもありますし・・・契約ですか」
シラユキを見て思うこのままでは、シラユキも危険に晒されるだろう。その希少性さゆえにだ。

『はーい・・・ならアタシ、シラユキは契約する！セルファとなら契約！珍しい魔獣は誰もが欲しがるならセルファがいい！』

狙った獲物を離すまいと、爛爛と目を輝かせたシラユキが言う。
魔獣らしくないのは、生後まもなく連れ去られ人間と過ごしてきたからだろうか？
いや小人族の３人が、世話していたからだろうか？こうも魔獣らしくない話し方をするのは
「シラユキ契約は一生ものですよ。魔獣としての自覚はないのですか」

本来、このように棚からボタモチ的な幸運などありえないのだ。
まだ幼生体だが、ＳＳランクの魔獣だ。
これが成長しきった時の成体の姿を思うと、どれだけの人族が欲しがるだろうか。
ＳＳランクの魔獣を所持する魔獣使いとなると、片手分もいないだろう。

「契約すれば、死ぬまで私に使役されることになります。まだ幼生体である貴方に、その意味が分かると思わないのですが、かと言ってこのままでは貴方を連れて歩くのは危険だろうし・・・」
セルファは考えこんでもどうも出来ないことに、シラユキと契約するしかないとわかっていた。

『なぁ兄ちゃん。こいつも契約できないか？』
話をずっと聞いていた小人族のカイが、樽からだした。謎の卵を転がしながら聞いてきた。
「カイくんそれは、非常食とかじゃなかったのですか？」
てっきり大きめ卵を、非常食として持ち込んでいたのかと思っていたのだが違ったようだ。

『違うよ。俺たちを捕まえた人族のおっさんがさ。こいつも世話しろって渡されたんだぞ。逃げるときに大河に沈んだら可哀相かと思って一緒に連れてきたんだ』

かなり重くて苦労したらしいが、なんとか転がしてここまで運んだと言うのが卵の真相らしい。
『この子まだ卵だけど、私たちとは会話できた・・・』
ミルが卵をなでてあげている。
小人族が世話をしていたのは、卵に話しかけたり時折卵を動かしたりくらいだと言う。

「これ何の卵なんですか？卵生の生物となると、孵化すれば出てくるのは鳥類か爬虫類か両性類？」
卵の殻の色はやや薄くブルーが入っており、水の属性の卵だろうと予想がつくくらいで、何の卵なのかもサッパリ分からない。
「孵化するとしても、いつか分からない上に、どのような状態にし

ておけばいいのか・・・」
何の卵かも、わからないのでは対処が難しいではないか。
『この子、自然の気を吸って育つ珍しい生物としか言われなかった。卵の殻が割れる時は孵化する時で、それまではどんなに高い場所から落としても絶対に割れないって』
エルたちは、この卵を人族のおっさんが実際に割ってみせる感じで硬い石畳とかに落としたりしたのを見たのだと言う。
孵化する時に最初に見た相手に懐くらしいので、余程のことがない限り危険はないらしいとのことだ。
「そうですか。孵化しなければ契約もなにもありませんので、これは孵化するまで様子みるしかないですね」
生きている卵を道具袋へと入れるわけにもいかないだろうし、セルファは卵入れでも作って運ぶかと考えた。

5

魔方陣が作動しているとわかってはいても、大河から聞こえてくる妖獣・魔獣の鳴き声
にエルがビクビクと反応している。

「火の番は私がしているので、先に寝てかまわないですよ」
セルファとエル以外は、すでにテントで眠っている。時折シラユキとカイの寝言が聞こえてくるくらいで、ミルは寝相が良いのだろう静かなものだ。

『大丈夫です。セルファさんこそ助けていただいて、本当に助かりました』
改めて御礼を告げる。

「たまたまお互い運が良かっただけのことです」
気にしなくて良いとセルファは告げる。

『それでも、お礼は言わせてください』

「貴方は律儀な性格のようですね。エルさん、貴方は『死に戻り』をどこで知りましたか？」
焚き火の炎が消えないように、枯木をくべながらどれだけのことを知るのか聞く。

『私が捕まっていた人族の所に居たのは、5年ほどです。その期間に二人の雇われていた冒険者が『死に戻り』でした。

ミルとカイは、ここ1年の間に連れてこられたのでそのことを知りません』

「そうでしたか。私の方は噂程度には聞くのですが、自分が『死に戻り』だと言いふらすような人物は見かけたことがなかったですね」

『死に戻り』『黄泉返り』の当たり障りのない話は聞くが、どれだけの者がその状態になっているのかさえ不明だ。

『セルファさん。私が知っていた『死に戻り』の方は二人とも死んでます。自分が変わることに耐えられず死を選んだ。いえ狂ったとしか
言い様がない有様の果てに死にました』

セルファも『死に戻り』だと言うのなら、そうなってしまっておかしくないのだとエルは言う。
助けてくれた恩人がそうなるのは辛すぎる。

「大丈夫。エルさん貴方には話しておいた方が良いのではないかと、考えてはいるのですが、今はまだその理由を話せそうにないです。ただ
確かに『死に戻り』は変わります。以前のは私であれば、このように私と言った話し方はしませんでした。
年齢相応に俺と言っていたはずなのですが、気づけば私と言い方を変えてます。『死に戻り』の影響でしょうね」

同じように『死に戻り』の果てに狂い死にした者たちは、変わる自分に恐怖したのではないかと考える。
適性があるかないかの違いなのかわからないが、それくらいしか思いつかない。
『わかりました。セルファさん。いずれは話てくださいね。』

「ええ　いずれ話せる時がきたら話ます。おやすみなさいエルさん」
明け方までセルファは魔方陣と周囲の様子をみつつ静かな夜を過ごす。

◆◆◆◆

いつの間にか転寝してしまったらしい、うっすらと空は明るくなりつつあるが大河のすぐ側のせいか朝靄が川面を隠している。
焚き火は消えかけ燻っていた。
夜に聞こえていた妖獣・魔獣の気配も消えているように見えるが、水辺に近づいてきた獲物を狙い潜んでいる可能性もある。
無闇に水辺に近づかない限りは安全だろう。

『おはよう～』
シラユキがテントの中から出てきて猫科特有のしぐさをしながら、大きく伸びをしている。
後ろからエルとミルが目を擦りながら起きてきた。カイはまだ寝ているようだ。
「おはよう。朝の準備はするので、死にたくなければ水辺には気をつけてください」

『？？？なんで？』
首をかしげるしぐさが可愛らしい。
「水辺に水を飲みにきた獣がいたとします。それを待ち伏せしている水棲の妖獣・魔獣の餌にされたいならお好きにどうぞ」
『・・・・・』
自分が引きずりこまれることを想像してか、ブルブルと震えてうな

ずく。

「ただし、後ほど水辺に流れ着いていた荷物を見にいきますからそれまで近づくのは我慢してください」
流れ着いた魔道船ーヴァンガードーの積荷の一部を確認しておきたい。

「今日もここで過ごします。ある程度の準備をしないことには移動は無理です。そうそうシラユキこれを」
隷従の首輪と言われ外した首輪だった。
「解析して分かったのですが、隷従の魔方陣と追跡の魔方陣を組み込ませていたのは真ん中にあった宝石だけでしたので外してあります。いずれそこには別の宝石いれてあげますので、残りは普通の首輪として使えます」
『わ～い・・そのキラキラつけて』
どうやらシラユキはキラキラしたものに目がないようだ。

「そして、エルにミルこれを」
差し出されたのは小人族サイズに作られた小さな三つの簡易リュックだった。
「見張りが暇すぎて、卵入れ用の袋作るついでに作りました。今はまだ入れられる物がそうないと思いますが、おいおい自分の物が増えると思うので使ってください」

『セルファさんありがとう』
エルが嬉しそうに言う。
『・・・セルファさ・・んお母さんみたい』
ミルも嬉しいのかもらったリュックを抱きしめつぶやく。
「私は朝食準備をしますから、焚き火の火の用意をお願いします。」

道具袋から取り出す食材で簡単なスープに、パンとシラユキには肉を炙ったものだけで大丈夫だろう。

異界の魔獣使い５（後書き）

感想下さった方、評価してくれた方ありがとうございます。
まだまだ感想おまちしてます。

６

道具袋から新鮮な野菜を取り出す。
旅立ちで購入したばかりの物ばかりだから、種類はかなり豊富のようだ。

肉類はベーコンと干し肉と生肉が入っている。
乳製品に生卵まで入っているとは侮れない。

用意したのは自分じゃないんだがなと思いつつも、とりあえず作れそうな
スープをさっさと作ることにした。

調理用具から調味料まで各種色々入っていた。

これらを道具袋に入れてくれた者は、余程の食い道楽ではないだろうか。
とりあえず時間がかからず簡単なスープを作り、道具袋からパンと飲み物も取り出す。

「シラユキ、肉は生？少し炙るのもうまいと思うが・・」

どのくらいの肉の量を食べたいか聞いてから、何の肉かわからないが切り分ける。
『生！生がいい～』

「わかりました。先にどうぞ」

シラユキの前に生肉を入れた皿を出す。

「エルさん　小さな食器がないので昨夜同様に3人で分けて食べてください」

『ありがとうございます。なにからなにまで。カイもいい加減そろそろ起きなさい！』

エルに起きろ～と揺さぶられカイがやっと起きてきた。

『にーちゃん・・・おはよう』

ふぁ～とまだまだ眠たそうにあくびをする。

『ほらシャキッとする！』

『カイは・・・ねぼすけ～』

ミルが寝起きのカイをからかう。

『ほらちゃんとこれ持って』

自分たちに合うサイズに木を削って作ったスプーンを渡す。

「パンがやや固かったので、スープに浸しておいたのでそのまま食べてみてください。」

飲み物は、なんとかコップになりそうな木の実の殻を利用して、そこに入れた。

「食べながらで良いので聞いてください」

セルファは、食後は川辺に行き、流れ着いた荷物を確認し、それが終わったら今後、どう行動をしたいのか話し合うので考えておいて欲しいと告げる。

『にーちゃん。これうめぇな』
カイが、なかなか噛み切れないのかベーコンの塊に苦労してるようだ。

『そういえばセルファさん。家族に無事は伝えなくていいのですか？』
自分たちと違って、セルファには心配してくれる家族がいるのではないかと思ったのだ。

「・・そうですね。確かに身内はいますが、今は不味いです。見つかったら確実に軟禁されます！」

『軟禁！』
なにそれどこの犯罪者？

「ええっ。私の場合は、そこそこ良い家柄もあって『死に戻り』したと知られたら軟禁されるのは確実です！」

精霊契約が廃棄されたのは、身内には即わかったはずだ。
自分が死んだと精霊が判断した時点で、精霊憑きの剣が身内の所へ戻ったはず。
やや過保護な身内が、なんの精霊とも契約していない自分を外に出そうとしないだろうことは確実だろう。

『にーちゃんも苦労してんだな』

「ええっ。なので、早急に新たな精霊契約および魔獣使いとしても使えるようにならないと不味いです」

でないと見つかった時点で、一生閉じ込められることもありえるのだ。

自分を心配してくれて、守るつもりなのだろうと分かってはいてもあそこでは自由は余りない。

『大丈夫〜。・・・シラユキ、セルファ守る！』

生肉を食べ終えて、毛づくろいしつつシラユキがそう告げる。

「そうですね。早く大人になって、一緒に訓練しましょう」

シラユキの大きさなら、後半年ほどで成長しきるのではないだろうか。

それまでに見つからずなんとかしなければならない。

いっそう魔獣使いの里に、住み込んでしまうのもアリではないかと考えたのだ。

異界の魔獣使い６（後書き）

書いていてお腹すいてきました。
どうもなかなか話が進みません。

感想おまちしてます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1933y/

エブラード王国物語－異界の魔獣使い－

2011年11月5日04時20分発行